

The Influence of Saigoku Risshihen on the Concept of Japanese 'Shousetsu' (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25376

『西國立志編』と明治初期の「小説」観（Ⅰ）

社会環境科学研究科 国際社会環境学専攻

三 川 智 央

The Influence of *Saigoku Risshihen* on the Concept of Japanese 'Shousetsu' (I)

MIKAWA Tomohisa

Abstract

Self-Help was written by Samuel Smiles and published in the U.K. in 1859. After its publication, the book was translated into various languages. It was translated into Japanese by Nakamura Masanao, and was published under the title of *Saigoku Risshihen* from 1870 to 1871. This Japanese version of *Self-Help* had a great deal of influence on the minds of the Japanese people of the early period of the Meiji era, including their concept of 'shousetsu', the Japanese version of the novel. However, not all the roles that *Saigoku Risshihen* played in this era are remembered and appreciated today. In this study, I will analyze the concept of 'shousetsu' presented in *Saigoku Risshihen* and clarify the nature of the influence that the concept of 'shousetsu' had on the minds of the Japanese people in that era.

Key Words

Meiji, novel, *Saigoku Risshihen*, *Self-Help*

1

一八五九年にイギリスで刊行されたサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の *Self-Help*¹⁾ は、本国イギリスで好評を博したのみならず、刊行直後からさまざまな言語に翻訳され、世界各国で多くの読者を獲得した書物として有名であるが、その中でも、当時、本国のイギリスを凌いで驚異的な発行部数を記録したのが、ほかでもない日本であった。

スマイルズの自伝 *The Autobiography of Samuel Smiles* の中には、イギリスにおける *Self-Help* の発行部数について、次のような記述がある²⁾。

During the first year 20,000 copies were printed, and 15,000 the second. Since then, the book

has continued in demand. Up to the present time, I think that about 160,000 have been printed.

刊行後、一年目で二万部。二年目でさらに一万五千部。そして、スマイルズがこの自伝の原稿を執筆していたと思われる一八九〇年代頃までには、およそ十六万部が発行されたと書かれている。また、この引用部分には、自伝の編集者トマス・マッカイ (Thomas Mackay) によって注が付されており、それによると、一九〇五年の初めの時点では、総発行部数は二十五万八千部近くに達していたとされる³⁾。

イギリス以外の状況も見てみよう。自伝には、*Self-Help* が翻訳された国として、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、フランス、ロシア、スペイン、トルコなどの名前があがってい

るが、中でもイタリアでは、大変な成功を収めたことが記されている⁴⁾。

The translation made into Italian was a great success. The book, I was told, had been more successful than any published in that country. When I was in Italy (of which more hereafter), in 1879, more than 40,000 copies had been published.

また、一八八九年のイタリア旅行の場面には、次のような記述もある⁵⁾。

There I met, amongst other illustrious persons, Signor Cesari Donati, the translator of *Self-Help* into Italian several years ago, under the title of *Chi si aiuta Dio l'aiuta*. Signor Donati informed me that the translation had gone through eighteen editions, and over 75,000 copies had been sold—an extraordinary circulation for Italy.

Self-Help のイタリア語版である *Chi si aiuta Dio l'aiuta* が発行されたのは、一八六五年。それから十四年後の一八七九年の時点で、発行部数は四万部を超え、さらに十年後の一八八九年には、十八版七万五千部を売り捌いたことになる。スマイルズは、一八七九年のイタリア訪問の際には王妃に謁見、翌年には勲章を授与されている⁶⁾。発行部数もさることながら、イタリアでは本国以上に国家規模での賞賛を受けていたようである。

しかし、この書物の日本での広がり、名実ともにいずれをも上回るものであった。そもそも、日本において *Self-Help* を最初に翻訳したのは、旧幕府の儒者・中村正直であった。慶応二（一八六六）年に幕府のイギリス留学生とともにロンドンに派遣された中村は、幕府瓦解によって急遽帰国を余儀なくされた際、一八六七年版の *Self-Help* を日本に持ち帰り、その邦訳を『西國立志編』と称して刊行した⁷⁾。木版刷り和装本全十一冊の刊行が完了したのは、明治四（一八七一）年のこと

である⁸⁾。ところが、この『西國立志編』は、刊行当初から予想以上の売れ行きを見せ、明治五年、日本に近代的な学校教育制度が取り入れられると、教科書として採用されることでさらに全国に流通し、発行部数をのばして行くこととなる⁹⁾。正確な記録が残っていないのが残念だが、明治二十七年刊行の博文館蔵版『改正西國立志編』の巻頭には、

維新以來刊行ノ圖書十數万種ニ下ラズ。而シテ其ノ發刊部數ノ最モ多キヲ故中村正直先生ノ西國立志編。及ヒ福澤諭吉先生ノ西洋事情。故内田正雄先生ノ輿地誌畧トス。三書共ニ發賣ノ部數各々數十万冊ニ上リ。明治ノ三大出版トシテ今尚ホ書林社會ニ傳唱セラル。

との記述があり¹⁰⁾、また、昭和十三年刊行の富山房版『西國立志編』の解説には、

「立志編」の初刊も木版半紙本十三編であつたが、それでさへ數十萬冊を發行したらうといふから、その後の活版や異版を加へると恐らく百萬を突破してゐるであらうと思はれる。

とある¹¹⁾。「百萬を突破してゐるであらう」とは、あくまで解説者の推測に過ぎないが、明治二十七（一八九四）年の時点で「數十萬冊」とあり、さらに『西國立志編』が明治期後半にかけても版を重ねていたことを踏まえれば、これはあながち無理な数字であるとも言えない。また、この『西國立志編』は、単に発行部数を伸ばしただけではなく、明治初期においては、政府の教育方針と密接に結び付きながら、国家的な権威さえも獲得していた。『明治天皇紀』には、明治六年から七年にかけて、明治天皇の学問の中にも『西國立志編』が取り入れられていたことが明記されている¹²⁾。日本は、『西國立志編』という形で、*Self-Help* の影響を最も強く受けた国であったと言えるのである。

ちなみに、スマイルズ自伝には、一八七三（明

治六）年にウィーンで万国博覧会が開催された折、日本の使節団を通して、中村正直からスマイルズに『西國立志編』一部が進呈されたことが記されている¹³⁾。また、同自伝には、スマイルズの友人であるチャールズ・W・サイクス（Charles W. Sikes）から届いた手紙の一部として、次のようなエピソードも紹介されている¹⁴⁾。

Excuse my mentioning a very pleasing incident that occurred the other day. A Japanese gentleman visiting Huddersfield came to this Bank, and after being introduced—he talked English fairly—I, amongst other inquiries, asked what English books were translated into Japanese. He said, amongst others, Milton and Shakespeare, which were greatly admired. I asked whether they had not any translations of Mr Smiles' works *Self-Help* and *Character*. His countenance suddenly became lighted up with animation and pleasure. "Oh yes!" he said, "they are my favourites. They are admirable books, and read by nearly everybody."

この手紙の内容は、明治四十一年に刊行された鶴田賢次『自助論の著者スマイルズ翁の自傳』の中で、次のように翻訳されている¹⁵⁾。

ツイ此間、誠に快い事に出會ひましたで、御免を蒙つて、之を左に御報道申上げます。「ジャパン」の或ル紳士が、當地「ハツダースフキールド」へ参つたことが御座りまして、其節、小生の銀行にも立寄りまして。可なりに甘く「イギリス」語を話す人でしたが、初對面の挨拶など済みましてから、私は、色々の事柄を尋ねて看ました。「ジャパン」では、ドノ様な「イギリス」の書籍が翻譯されて居るだらうかと問ひましたら、彼は、イヤ、色々あるが、先ヅ「ミルトン」や、「シエクスペア」であらう、是等が最も酷く持囃されて居ると、答へました。ソレから、「スマイルズ」

氏の自助論や、品性論などは、翻譯されて居るだらうかと問ひましたら、一見る間に、意氣軒昂と謂ふべき風姿にて、ニコヤカな顔容して、一ハア、アレですか、アレは、實に良い書物です。曾ては、私も酷く喜んで讀みました。大概の「ジャパン」人は讀んで居りますと、答へました。

手紙は、一八七四年十一月十日に娘のエディス（Edith）が亡くなった後、一八七五年に *Thrift* が刊行されるまでの間に書かれており、日本人紳士とサイクスの間で先に引用したような会話がなされたのも、その頃であつたと推測される。日本では、明治七年の末から明治八年にあたる。文中で、サイクスは *Self-Help*（鶴田訳では「自助論」）とともに *Character*（一八七一年刊、鶴田訳では「品性論」）の日本における翻訳について質問し、日本人紳士は、その両方について返答しているように見えるが、明治七、八年の時点では、まだ *Character* の邦訳は行われていない¹⁶⁾。日本人紳士が「實に良い書物」であり「大概の「ジャパン」人は讀んで居ります」と答えたのは、*Self-Help* の邦訳本『西國立志編』のみを念頭に置いてのことであろう。明治初期、『西國立志編』は、「大概の人が読んでいる」と日本人自身が感じるほどに、日本の社会に深く浸透していたのである。

2

では、それほどまでに日本に広がっていた *Self-Help* の邦訳本である『西國立志編』が、明治初期の社会や人々に与えた影響には、具体的にどのようなものがあつたのだろうか。この点については、これまでも様々な角度から考察が行われてきたことは確かである。いくつか列挙してみる。

まず、個々人に与えた影響を記録したものとしては、石井研堂『自助的人物典型 中村正直傳』（明治四十年）が挙げられる。石井は、この著の中に「『立志編』の感化力」という一章を設け、雑誌『成功』の記事などから、『西國立志編』に

影響を受けた人々の声を拾い上げ、集録している¹⁷⁾。同時代の人々の証言が記録されているという点では、貴重な史料ともなるべきものである。また、時代が下って、柳田泉は『明治初期の文学思想』（昭和四十年）の中で、「実は明治初めの訳書でこれほど豊富に近代イギリス文学の知識を移入してくれた書物はほかにないのである」として、『西國立志編』が「西洋文学移入史の上からも、大いに意味のあるもの」であることを指摘した¹⁸⁾。

本格的な研究としては、前田愛「明治立身出世主義の系譜—『西國立志編』から『帰省』まで」（昭和四十年）、および竹内洋『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望』（平成九年）が、『西國立志編』と明治期の立身出世主義との関係を詳細に考察し¹⁹⁾、また、松沢弘陽『『西國立志編』と『自由之理』の世界—幕末儒学・ビクトリア朝急進主義・「文明開化」—』（昭和五十一年）は、政治思想史の観点から、『西國立志編』が、明治初期には民権思想や社会改良思想の育成に役立った反面、結果的には国家権力の中で「排他的な上昇志向」を促す書として受容されたことを指摘した²⁰⁾。近年では、平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ケ—中村正直と『西國立志編』—』（平成十八年）が、『西國立志編』こそが明治文学の一大源泉であった」として、この書の影響が「明治・大正・昭和の三代の学校教科書、児童文学、演劇、小説」に広く及んでいることを、広汎かつ具体的に検証している²¹⁾。このほか、『西國立志編』で使用された翻訳語については、国語学的な立場から多くの研究がなされてきたことは、言うまでもない。

しかし、このように研究が積み重ねられてきた現在にあっても、『西國立志編』が明治期の社会に与えた影響の中には、まだまだ、見落とされたままになっている部分が多いことも事実である。

私は、先に、拙稿「『西國立志編』における翻訳語としての「小説」」において、『西國立志編』では、原著 *Self-Help* 中の novel あるいは romance という単語が一貫して「小説」と翻訳されていることを明らかにし、近世にあつては、読本や滑稽本などの戯作を表す語として、一部の人々の間で

のみ使用されていた「小説」という漢語が、文芸の一ジャンルを示す新たな言葉として明治初頭の日本に広く定着したのには、『西國立志編』が深く関わっていたと考えられることを指摘した²²⁾。つまり、明治初期の日本における「小説」の実態を解明するためには、『西國立志編』の影響を考察することが、必要不可欠となってくるのである。ところが、これまでの文学研究において、この点に着目した研究はほとんど行われてこなかったと言っても過言ではない。

本稿において私は、先行する論考「『西國立志編』における翻訳語としての「小説」」で明らかにした点を踏まえつつ、まず前半で、『西國立志編』が「小説」についてどのような概念を提示していたのかを、原著 *Self-Help* との比較も行いながら詳しく考察することとする。また、後半においては、その「小説」概念が、明治初年代の社会にどのような影響を与えたのかを具体的に考えてみることにする。従来の研究においてはほとんど顧みられることのなかった『西國立志編』の「小説」概念と、その社会への影響を考察することで、未だ明らかにされているとは言い難い明治初期の文学の実態に迫ってみたい。

3

まず最初に、『西國立志編』の中で「小説」について書かれている部分を具体的に挙げてみよう。『西國立志編』の本文には、「小説」という語が、六つの章に渡って合計十箇所用いられている（引用に際し、「小説」という語をゴシック体で表記した）²³⁾。

① ^{ブルウエア} ^{リフツン} 伯爾 芝・^{シバホボン} 律敦ハ、マタ貴族ニ生レテ、彊志勉學ノ人ナリ。ソノ著ハストコロノ書、小説アリ、詩アリ、戯曲アリ、史類アリ、文章アリ、盡ク世ニ稱セラル。又辨論ニ長ジ、政學ヲ善クセリ。^{リフツン} 律敦安逸ヲ嫌ヒ、熱心勉強シテ妙處ニ至ル「ヲ務メトセリ。」故ニ當時英國著書家ノ中ニ^{リフツン} 律敦ノ如ク著書ニ富ミ、盛譽ヲ得タルモノハア

ラズ。」抑モ、射獵ヲ好ミ、安逸ヲ事トシ、屢々宴會ニ赴キ、演劇ヲ樂ミ、倫敦千百ノ歡娛ヲ極メ或ハ遠ク巴里 維也納 羅馬ニ遊ブハ、大産ヲ擁シ、樂事ヲ嗜ム人ノ通常ノ習ナルニ、獨リ 律敦ハ、一意ニ藝文ノ事ニ努力シ、更ニソノ他ノ嗜好アラザリケリ。」ソノ始メニ著セル書ハ、歌詩ノ體ニテ、ウィーンズアンドウテイル 下ブラワース〔野草野花〕ト云ヘルモノナリシガ、世人ニ毀レタリ。」次ニ作レルモノハ、小説ニシテ、ファルケランドト云ナリシガ、マタ敗レヲ取レリ。」（第一編三十）

- ②堅質ノ陶器ヲ創製セシ約翰・弗列德力・薄查ハ、大ニ巴律西ノ行狀ト異ナリ、然レドモ、ソノ小説ニ似タル談話アルハ、コレニ似タリ、（第三編三）

- ③何ニトナレバ劍ヲ以テ、手中ノ一小物ヲ切り、ソノ手ヲ傷ルナキハ、能スベカラザルナリ、斯格的ノ小説ニ、コレニ類スルアレドモ、信シ難シ（第八編十九）

- ④律賓斯敦ハ、（中略）始メテ得タル工錢ヲ以テ、拉丁文法書ヲ買ヒ、夜中ニコレヲ學ブ、又小説ヲ除ク外、博ク群書ヲ究メ、紡機ノ上ニ書ヲ置キ、コレヲ讀ニ至ル、カクノ如ク勉強シテ有用ノ學問ヲ多ク胸中ニ積ミ貯ヘ、又醫學會所ニ往キ、刀圭ヲ學ビ、又或ハ上帝道ノ講義ヲ聴ク（第八編二十三）

- ⑤稗官小説ハ、人ノ戲笑ニ供シ、ソノ心志ヲ蕩散スルモノニシテ、教養ノ事ヲ穢ス、コレヨリ甚キハナシ、今世ニ、カクノ如キ書ヲ著スモノアリテ、時人ノ好ニ投ゼント欲シ、卑俗ヲ嫌ハズ諧謔ヲ避ケズ、人倫ノ法ヲ破リ、上帝ノ律ヲ慢ル、眞ニ厭ハシクベキナリ、ドーグラス・ジーエロルト曰ク、人生ハ、端莊嚴肅ナルモノヲ存セザルベカラズ、然レニ人或ハ萬事ヲ以テ、戲笑ノ具ト爲シ、戲文戲画ヲ作り、神明ヲ褻瀆シ、一世ヲ病害スルモノアリ、嘆息ニ堪ヘズト

云ヘリ、戎・斯打林マタ曰ク、稗官小説、遍ク世人ヲ害シ、就中心志未ダ定マラザル人ヲ害スル、疫癘ヨリモ甚シ、恰モ水ヲ臭壞スル惡虫ノ、飲者ヲ病マシムルニ似タリト云ヘリ、抑モ勞苦ノ業ヲ做スモノ、暫クソノ精神ヲ休養センガ爲メニ、小説ヲ讀マント欲セバ、意義文辭ノ佳美ナルモノヲ擇ビ取ベシ、然レドモコレヲ以テ多分ノ時ヲ費スハ、大ニ不可ナリ、蓋シ小説ヲ讀ム癖習トナルトキハ、壯旺ノ情懷、コレガ爲メニ麻痺シ、健安ノ心思、コレガ爲メニ衰耗スルナリ、怕ベシ、一ノ快活ナル人、嘗テ約克ノ教大長ニ向テ「我往テ悲戲ヲ聴シナシソノ吾心ヲ費シ盡スヲ怕レタリ」ト云ヘリ、設テ作タル痛マシキ談話ハ、人ヲシテ憐愛ノ心ヲ起サシムレドモ、コレニ合ル行狀ニ導カシムル能ハズ、吾心ニ一時情感ヲ受クレドモ、實事ト相干係セザレバ、久シキ後ニハ消滅シテ、跡ナキニ至ルベシ、タトヘバ、剛鐵ノ如シ、次第ニソノ本質、刮リ去レテ、跳返ヘスコトノカヲ失フナリ、教大長拔的拉曰ク、假造ノ談ヲ聞ハ哀憐ノ心ヲ生ズレドモ、哀憐ノ行ヲ習フ能ハズ、故ニコレヲ聞ゴトニ、次第ニ感動スル薄ナリテ、後ニハ頑然無情ニ至ルベキナリト云ヘリ、（第十一編二十四）

- ⑥今世有名ノ著書家ナル壹丁不ノ維廉・章罷士、嘗テ衆少年ニ向ヒ、ソノ志ヲ勵サンガ爲メ、自ラソノ少時貧困ナリシヲ語リテ曰ク、我ハ自ラ教養セシ人ナリ、賣書家ノ徒弟トナリシ時、曉七八時ヨリ、夜九時或ハ十時ニ至ルマデ、職事ニ忙カリシ故、睡眠ヲ減ジテ、窮理學、及ビ其他有用ノ學科ニ從事シ、又コノ時法蘭西語ヲ學ビ、稗官小説ノ類ヲハ嫌テ讀マザリキ、（第十一編三十五）

この中で、まず注目すべきは⑤であろう。⑤は第十一編の二十四「稗官小説ノ害」の全文である。『西國立志編』の中では唯一、「小説」が主題として取り上げられ、「小説」についての具体的な見解がまとまって記されている部分なのだが、その

内容は、「稗官小説ノ害」というタイトルの通り、徹頭徹尾「小説」の弊害を並べ立てたものとなっている。しかし、なぜ、これほどまでに「小説」は非難されなければならなかったのか。あらためて文を整理しながら読んでみると、どうもその根本には、「小説」を「設^{セツ}作^{サク}リタル」「實事ト相^{アツカル}干^{カン}係^{ケイ}セザレバ、久^{キウ}シキ後^ゴニハ消滅シテ、跡ナキニ至ル」「假^{ニセツクリ}造^{ゾウ}ノ談」、つまり「事実とはかけ離れた虚構」と規定する意識があることがわかる。「小説」はどれもが「事実とはかけ離れた虚構」であるからこそ、いくら「意義文辭ノ佳美ナルモノ」であったとしても、「小説」を読むことに「多分ノ時ヲ費^{キス}」と、「壯^{サカシナル}旺^{ワウ}ノ情懷^{コウ}、コレガ爲^ニ麻痺^{マヒ}シ、健安^{ケンアン}ノ心思^シ、コレガ爲^ニ衰耗^{セウコウ}スル」のであり、「後ニハ頑然無情ニ至ル」のである。「心志未ダ定マラザル人」、つまり若者は特に注意しなければならないと言うのも、年少であるほど虚構世界に耽溺してしまいやすいという理屈であろう。また、具体的に名前を挙げているわけではないが、近頃の「小説」は、「時人^{コノミ}ノ好」に迎合するあまり、「卑俗ヲ嫌^{アナド}ズ諛^{コトワ}ヲ避^{イダ}ズ、人倫ノ法ヲ破リ、上帝ノ律ヲ慢^{オキテ}ル」ようにまでなっているとも述べている。

ほかの部分はどうか。①は、イギリスの政治家であり、小説家としても活躍したリットン（Edward George Earle Bulwer-Lytton）を取り上げた章の一部である。ここでは、「小説」は、「詩」「戯曲」「史類」などと並ぶ文芸の一ジャンルとして登場してきているだけで、それがどのようなものなのかは述べられていない。リットンは、明治期の日本人が好んで読んだ作家の一人として有名であるが、彼の作品を含め、日本で西洋小説が読まれ出したのは、早くも明治九年から明治十年頃のことと言われている²⁴⁾。少なくとも明治初年代の日本人は、リットンはもとより、西洋の「小説」がどのようなものか、実際には目にしたことはなかった。

②③では、「小説」が文芸の一形態を指していると同時に、⑤で示された「事実とはかけ離れた虚構」という本質を踏まえて用いられていること

がわかる。②の「小説ニ似タル談話」とは、「虚構の物語のような興味をひく話」といった意味であろうし、③の「ス格的ノ小説ニ、コレニ類スル「アレドモ、信ジ難シ」からは、「小説」の中の出来事は虚構に過ぎず、現実には起こり得るはずはないという意識がうかがえる。また、ここに名前が登場するスコット（Walter Scott）はイギリスの詩人であり小説家だが、この場合も先程のリットンと同様に、当時の日本人に「ス格的ノ小説」を知る人は、いなかったと言ってよいだろう。

最後に④と⑥についてだが、これはまさに、⑤の「稗官小説ノ害」で述べた、「小説」を読むことに「多分ノ時ヲ費^{キス}」べきではないという教訓の正当性を、リヴィングストン（David Livingstone）やウィリアム・チェンバーズ（William Chambers）といった偉人の行動の中で実証した格好になっている。「拉丁文法書」「窮理學、及び其他有用ノ學科」「法蘭西語」といった有用な書物や学問に対して、「小説」が無用なものであることを印象づけている。

以上、『西國立志編』の中から「小説」に関係した部分を概観してみたが、ここから浮かび上がってきた「小説」の概念をまとめると、「事実とはかけ離れた虚構を、卑俗な面白さばかりを強調して描き、人の心を惑わせる、無用かつ有害な文芸」ということになろうか。『西國立志編』を、「實に良い書物」として「酷く喜んで讀」んでいた明治初年代の日本人の間には、「小説」の概念はこのような姿で広まっていったのである。

4

しかし、ここで確認しておかなければならないのは、『西國立志編』が原著 *Self-Help* の内容を、正しく原文と同じニュアンスで伝えているのかどうかという点である。中でも、「小説」を主題として取り上げた第十一編の二十四「稗官小説ノ害」はどうか。 *Self-Help* の該当部分を引用してみる（文中の波線は引用者による）²⁵⁾。なお、引用に際し、『西國立志編』で「(稗官)小説」と

訳されている語を、ゴシック体で表記した。

Another way in which education may be prostituted is by employing it as a mere means of intellectual dissipation and amusement. Many are the ministers to this taste in our time. There is almost a mania for frivolity and excitement, which exhibits itself in many forms in our **popular literature**. To meet the public taste, our books and periodicals must now be highly spiced, amusing, and comic, not disdaining slang, and illustrative of breaches of all laws, human and divine. Douglas Jerrold once observed of this tendency, "I am convinced the world will get tired (at least I hope so) of this eternal guffaw about all things. After all, life has something serious in it. It cannot be all a comic history of humanity. Some men would, I believe, write a Comic Sermon on the Mount. Think of a Comic History of England, the drollery of Alfred, the fun of Sir Thomas More, the farce of his daughter begging the dead head and claspng it in her coffin on her bosom. Surely the world will be sick of this blasphemy." John Sterling, in a like spirit, said: — "Periodicals and **novels** are to all in this generation, but more especially to those whose minds are still unformed and in the process of formation, a new and more effectual substitute for the plagues of Egypt, vermin that corrupt the wholesome waters and infest our chambers."

As a rest from toil and a relaxation from graver pursuits, the perusal of a well-written **story**, by a writer of genius, is a high intellectual pleasure; and it is a description of literature to which all classes of readers, old and young, are attracted as by a powerful instinct; nor would we have any of them debarred from its enjoyment in a reasonable degree. But to make it the exclusive literary diet, as some do,

—to devour the garbage with which the shelves of circulating libraries are filled,—and to occupy the greater portion of the leisure hours in studying the preposterous pictures of human life which so many of them present, is worse than waste of time: it is positively pernicious. The habitual **novel**-reader indulges in fictitious feelings so much, that there is great risk of sound and healthy feeling becoming perverted or benumbed. "I never go to hear a tragedy," said a gay man once to the Archbishop of York, "it wears my heart out." The literary pity evoked by fiction leads to no corresponding action; the susceptibilities which it excites involve neither inconvenience nor self-sacrifice; so that the heart that is touched too often by the fiction may at length become insensible to the reality. The steel is gradually rubbed out of the character, and it insensibly loses its vital spring. "Drawing fine pictures of virtue in one's mind," said Bishop Butler, "is so far from necessarily or certainly conducive to form a *habit* of it in him who thus employs himself, that it may even harden the mind in a contrary course, and render it gradually more insensible."

『西國立志編』の第十一編二十四は、*Self-Help* では、第十一章「SELF-CULTURE—FACILITIES AND DIFFICULTIES.」の一部にあたる。ただし、*Self-Help* では、第十一章全体が一つのまとまりになっていて、それをさらに細分化してタイトルを付けるといったことはなされていない。第十一章中のこの部分に「稗官小説ノ害」というタイトルを付け、一つのまとまりとしたのは、翻訳者の中村である。よって、本来ならば、self-culture(自己修養)を主題とした大きなまとまりの中で読まれるべきこの部分が、『西國立志編』では独立したテーマを持つ一つのまとまりとして扱われることで、原文以上に「小説」の害が強調された形となっている。また、本文を見ると、原文の方では、

筆者の視点はあくまでも教養 (education) の在り方に置かれていて、そこから現代の大衆向け文芸 (popular literature) の下劣さを非難する書き方になっているのだが、『西國立志編』では、popular literature や novel といったものが一貫して「(稗官) 小説」と訳され、冒頭から「小説」の弊害が書き立てられる。また、キリスト教に関係する「山上の垂訓」(Sermon on the Mount) に触れたダグラス・ジェロルド (Douglas Jerrold) の言葉の一部が翻訳されていないのはやむを得ないとしても、原文後半、休養としての読書について述べられたところで、波線部分がまったく翻訳されていないのは、翻訳者による改ざんといしか言いようがない。波線部分を訳してみると、「文芸作品の描写には、老人も若者も、すべての階層の読者が本能的に強く惹きつけられるし、また、我々が程度をわきまえて読書を楽しんでいる分には、その楽しみを妨げられることはない」となる。『西國立志編』では、この部分が省かれているために、「小説」の害が一層強調された形になってしまっているのである。

なぜ中村は、このような意図的な操作を行ったのか。この疑問に対する答えは、彼が novel の翻訳語として「小説」という漢語を選んだ理由とも深く関わっているように思われる。

5

翻訳者である中村が、*Self-Help* 中の novel あるいは romance といった単語を「小説」と翻訳するにあたって、英華字典から得た知識を拠り所としていたということは、すでに先行論文において明らかにした通りである²⁶⁾。しかし、彼が、そのまま英華字典の知識である「小説」という語を採用したのはなぜだろうか。当時、「小説」は漢語として日本の文化に入ってきてはいたものの、一般的な日本人にとっては耳慣れない言葉であった。安政六 (一八五九) 年に江戸で生まれた淡島寒月は、大正十四年に『早稲田文學』に掲載した随筆「明治十年前後」の中で、「一體小説といふ言葉は、

すでにかなり新しい言葉なので、はじめは讀本^{よみほん}とか草双紙とかと呼ばれてゐたものである。が、それが改まつたのは、戊申の革命以後のことである」と証言している²⁷⁾。つまり、明治初年代の多くの日本人にとって、『西國立志編』の中に登場してくる「小説」という語は、自分たちの言語に未だ馴染むことのない漢語として、ある種の違和感を伴って立ち現れていたはずなのである。ちなみに、*Self-Help* の翻訳作業に先立つ慶応三年には、すでに J・C・ヘボン (James Curtis Hepburn) によって『和英語林集成』の初版も刊行されていたが、この辞典の「英和の部」には novel も取り上げられており、その訳語としては「Kusazōshi」(草双紙)、「sakumono-gatari」(作物語) があてられている²⁸⁾。漢語である「小説」よりも、こちらの方が、当時の日本人の耳に馴染む言葉であっただろうことは言うまでもない。もし、翻訳作業時に『和英語林集成』が手元になかったとしても、「小説」という漢語が日本の戯作を指す言葉としてもしばしば用いられている²⁹⁾ことを、中村が知らなかったはずはない。にもかかわらず、「小説」から一歩進めて、より一般的な日本語に目を向けることをしなかったのはなぜか。

おそらく、そこには、漢学者として生きてきた中村自身の世界観と、そこから生じる意識が、深く関わっていたと思われる。彼は、江戸幕府の儒者でありながら、西洋の学問や思想にいち早く目を向け、慶応二年、幕府がイギリスへの留学生派遣を計画した際には、自ら志願して一行に加わった³⁰⁾ほど、洋学研鑽への熱意を持った人物であった。しかし、根本では、彼の世界観は漢学の知識と儒教的道徳によって支えられており、それは彼が西洋の文化に接した後も変わることはなかったと考えられる。

イギリスから帰国した直後の明治元年に執筆された「敬天愛人説」という文章の中で、彼は次のように述べている³¹⁾ ([] 内の書き下しは引用者による)。

天者生我者。乃吾父也。人者與吾同爲天所生

者。乃吾兄弟也。天其可不敬乎。人其可不愛乎。

〔天は我を生ずる者。乃ち吾が父なり。人は吾と同じく天の生ずる所たる者。乃ち吾が兄弟なり。天其れ敬せざるべけんや。人其れ愛せざるべけんや。〕

一見すると儒教の教えを説いたように思われるこの文章は、実は、「キリスト教的なゴッドを儒教思想の天の思想から解釋しようとしたもの」だと言われている³²⁾。つまり、中村は、西洋の文化も根本では東洋の思想に通じるものだと考え、キリスト教の教えを儒教的な世界観で受けとめようとしたのである。そして、この姿勢は、*Self-Help*の翻訳においても変わりはいなかった。*Self-Help*の冒頭に掲げられた有名な格言「Heaven helps those who help themselves」は、『西國立志編』では「天ハ自ラ助^ルモノヲ助^ク」というように漢文体で翻訳され³³⁾、儒教的な枠組みでとらえ直されている。novel や romance を「小説」という漢文世界の言葉で置き換えたのも、『西國立志編』全体の文脈を踏まえれば、当然のことであったと考えられる。そしてまた、この漢文世界の言葉で綴られた文章こそ、近世の価値観では「文学」に値するもの、つまり、人々が学ぶべきものだった。中村は、『西國立志編』という「日本人が英語から一冊まるごと訳した最初の本」³⁴⁾を、正統的「文学」の系譜に連なるものとして、人々の前に示したのである。

幸田露伴は、昭和八年に雑誌『文藝』に掲載された「明治初期文學界」と題する文章の中で、『西國立志編』について次のような興味深い指摘を行っている³⁵⁾。

中年の先生の信仰が基督教的であつたためにやゝ世の反感を得てゐられたにかゝらず、其の翻譯立志篇を通じて、攘夷的感情の懷抱者までをして西洋文明を窺知するに至らしめたのも、實は立志篇の文が漢學的に瑕疵無くて平明であつたゝめである。これに反して福

澤先生のものが當時の一部分の者に反感を以て迎へられ、或は嫌はるゝに至つたのは、其内容の故ばかりでは無く、其頃の眼から見れば餘りにも學問的修辭をおろそかにしたのに見えたからであつたらう。

『西國立志編』が明治初年代の日本の社会に広く浸透し、道徳的な指針としての役割を果たしたのは、それが西洋の文化を伝えるものであったと同時に、漢語を多用した漢文体の文章そのものが、「文学」としての權威を有していたからだと言えるだろう。

6

ここで再び⑤の文章、つまり『西國立志編』の第十一編二十四に戻ってみよう。すると、「稗官小説ノ害」というタイトルを始めとして、「人倫ノ法ヲ破リ」「上帝ノ律ヲ慢ル」といった文中の語に至るまで、この一章全体が、産業革命後の近代市民社会における教訓というよりは、むしろ、中国の儒教社会における小説禁圧を連想させるものであることに気づく。

周知のごとく、中国では歴代の王朝が様々な理由で禁書政策を行ってきた。しかし、それが最も厳しく徹底した形で実施されたのは、清朝においてであったと言われている。しかも、清朝の禁書政策の特徴は、その禁令が小説にまで徹底して及んでいることにあった。章培恒・安平秋主編、氷上正・松尾康憲訳『中国の禁書』は、その状況を次のように述べている³⁶⁾。

順治から乾隆時代まで、清代の統治者の通俗小説及び戯曲などに対する禁圧はずっと引き締められた状態であった。その原因は、彼らが「天下を治めるには、人心と風俗を基本とし」、小説や戯曲は人心を惑わすものであり、風俗への影響が大きいので、彼らの統治にかなりの打撃を与えると考えたからであった。（中略）明代後期から、資本主義の萌芽

と発展にともない、人々は意識形態の面においてもそれにふさわしい変革を要求したが、清朝の為政者は「経学を尊び、聖でない書物は厳しく禁じ」て「人心を正し、風俗を厚くする」という思想統制を堅持しつづけたのであった。(中略)光緒帝(徳宗、生没一八七一～一九〇八、在位一八七四～一九〇八)が一時的に維新変法を企てた以外、清代後期の皇帝は依然として伝統を引き継ぎ、厳格に思想を抑圧し、小説や戯曲の禁圧も緩めなかった。

同著には、禁書を命じたいくつかの勅諭について、その文言が翻訳された形で引用されている。具体的なニュアンスがわかると思うので、康熙五十三(一七一四)年と道光十四(一八三四)年の勅諭を孫引きさせていただく³⁷⁾。

私は天下を治めるには、人心と風俗が基本だと思う。人心を正し、風俗を厚くするには、経学を尊び非聖の書は厳しく禁じなければならない。これは永遠の道理である。近頃坊間では小説淫詞を多く売っているが、その内容は荒唐無稽で全く道理などない。また愚民を誘惑し、読書人も目が移り心を惑わされている。風俗上細やかでないものは、厳しく禁じる処置を取る〔「聖祖実録」巻二五八〕

近来、伝奇や演義などの書物が、新しく次々と出版されているが、その語句の多くは卑俗である。当初は市井の徒が喜んで読んでいたが、やがて児童婦女にまでも流行して、放蕩を風流、剛暴を豪傑、輕薄を有能、猥褻を日常的なものとして考えるようになった。また虚妄の言に仮託し、まじないやお祓いなどの術を作り出し、無知蒙昧な者は鉦や太鼓を叩き、裁判ごたは日ごとに増え、盗みが頻繁に行われているのは、こうした書物の影響だと言わざるを得ない。今後、各省の督撫や府尹は地方官に厳しく調査を命じ、もし民間の書

店で刊刻したり、淫書小説を貸し出ししているものがあれば、その版本や書物を没収し、すべて焼却に処すること。正当なる処置を経て民心を正し、すべての不正を平らげることが、朕は強く望む〔「宣宗実録」巻二四八〕

儒教的秩序を国家統治の根幹とした当時の中国において、「小説」はまさに、人心を惑わし風紀を乱す卑俗かつ荒唐無稽な「虚妄の言」として、禁止すべき有害なものであった。そしてまた、当然のことながら、中国におけるこのような「小説」に対する意識は、日本の儒学者の間にも伝わっていた。江戸中期の儒学者である清田儼叟は、中国の白話小説『水滸伝』を評する際に、文章の冒頭でわざわざ「水滸傳者通俗之書。且專說詐偽機謀。不可以爲訓」(水滸伝は通俗の書。且つ専ら詐偽機謀を説く。以て訓と爲すべからず)と断ってから、その評を書き始めている³⁸⁾。また、江戸後期に昌平黌の儒官であった佐藤一斎は、『言志叢録』の中に、「稗官野史。俚説劇本。吾人宜如淫聲美食遠之。余年少時。好讀此等書。到今追悔不少」(稗官野史。俚説劇本。吾人宜しく淫聲美食のごとく之を遠ざくべし。余年少の時。好み此等の書を讀む。今に到り追悔少なからず)と記した³⁹⁾。「稗官」「野史」「俚説」といったものが、中国白話小説の類を指すことは言うまでもない。

おそらく、翻訳者である中村は、先程引用した *Self-Help* の第十一章の一部を読んだ際に、東洋の儒教社会におけるこうした「小説」の状況を脳裏に思い描いたのではなかろうか。キリスト教の「神」を「天」に置き換え、儒教的な枠組みで西洋文化を受け入れようとした中村は、英語の *novel* を「小説」という漢語に翻訳しただけでなく、その社会的状況までも中国儒教社会における「小説」の実態に重ね合わせ、翻訳を行っていたと考えられるのだ。彼にしてみれば、イギリス発展の基礎となっている近代市民社会の倫理は、近世以来の日本が拠り所としてきた儒教倫理と、根本においては共通したものとして認識されていたに違いない。翻訳の際の操作は、このような意識の中

で、より効果的に「小説」（西洋における novel）の害を日本の社会に伝えようとして生じたものと思われる。

注

- 1) 一八五九年十一月にロンドンの出版社 John Murray から初版が刊行された。
- 2) Samuel Smiles, Edited by Thomas Mackay, *The Autobiography of Samuel Smiles*, John Murray, 1905, p. 223. 本文の引用は架蔵本に拠った。
- 3) 注2に同じ。
- 4) 注2に同じ。p. 229.
- 5) 注2に同じ。p. 409.
- 6) 注2に同じ。pp. 344-345.
- 7) 初刊本『西國立志編』第一冊の扉裏には、「Professor Nakamura / With H W Freeland's / Kind Regards.」と読める英文筆記体の献辞が模刻され、その下に、「戊辰四月余去倫敦時弗理蘭德君以此書原本見贈巻首題此三行乃其手書也今模寫付刻俾子孫永莫忘其所自云／中村正直識」と記されている。このことから、中村が日本に持ち帰った *Self-Help* は、彼が明治元（一八六八）年、留学先のロンドンを離れる際に H. W. Freeland なる人物から贈呈されたものであることがわかる。なお、*Self-Help* は一八五九年の刊行後、一八六六年五月には著者による大幅な増補改訂が行われ、その後も版を重ねる中で多少の修正が行われた。初刊本『西國立志編』の扉には「原名自助論 一千八百六十七年倫敦出版」とあることから、中村が翻訳に使用したのは、増補改訂後の一八六七年一月に出版されたものであったことがわかる。
- 8) この点については、拙稿『『西國立志編』はどのようにして明治初期の社会に広がったのか』（金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第17号, 2009, pp. 69-81）に詳しい言及がある。
- 9) 注8に同じ。
- 10) 「改正西國立志編刊行ニ就テ」と題する巻頭言の一部。巻頭言の文末には、「明治廿七年六月博文館創業第七週年之日 門人 大橋新太郎謹識」とある。本文の引用は架蔵本に拠った。
- 11) 富山房百科文庫『西國立志編』の柳田泉による「解説」。pp. 15-16.
- 12) 注8に同じ。
- 13) 注2に同じ。p. 230.
- 14) 注2に同じ。p. 304.
- 15) 鶴田賢次『自助論の著者スマイルズ翁の自傳』博文館, 1908, pp. 4-5. 本文の引用は架蔵本に拠った。
- 16) スマイルズの *Character* が中村正直によって邦訳され、『西洋品行論』として刊行されたのは、明治十一（一八七八年）年六月から明治十三（一八八〇）年二月にかけてであった。
- 17) 石井研堂『自助的人物典型 中村正直傳』成功雑誌社, 1907, pp. 68-79.
- 18) 柳田泉『明治初期の文学思想』上巻, 春秋社, 1965, pp. 259-260.
- 19) 前田愛「明治立身出世主義の系譜—『西國立志編』から『帰省』まで」は、昭和四十年四月『文学』に初出。竹内洋『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望』は、日本放送出版協会より平成九年に刊行。
- 20) 日本政治学会年報『日本における西欧政治思想』岩波書店, 1975, pp. 9-53.
- 21) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク—中村正直と『西國立志編』—』名古屋大学出版会, 2006.
- 22) 福井大学言語文化学会『国語国文学』第48号, 2008, pp. 11-22.
- 23) 『西國立志編』の本文はすべて、初刊本と思われる架蔵本に拠った。
- 24) この点については、本論の後半でも言及することになるが、市島春城が大正十四年に『早稲田文学』に掲載した「明治文学初期の追憶」には、「明治の九年十年の頃に帝大でボツ／＼西洋小説に読み耽ることが行はれ初めたが、しかし此の趣味家は甚だ少なかつた」との記述がある（『早稲田文学』大正十四年七月号, p. 14.）。
- 25) *Self-Help* の本文はすべて、一八六七七年刊行の *Self-Help ; with Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance* (架蔵本) に拠った。
- 26) 拙稿『『西國立志編』における翻訳語としての「小説」』福井大学言語文化学会『国語国文学』第48号, 2008, pp. 11-22.
- 27) 『早稲田文学』大正十四年三月号, p. 133. 文中の「戊申」は原文のままだが、「戊辰」の誤植と思われる。
- 28) 語句の確認および引用は、飛田良文・李漢燮編『ヘボン著和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』第3巻（港の人, 2001）に拠った。なお、現在、静嘉堂文庫に収められている中村正直直筆の蔵書目録「敬字文庫洋書総目録」には、*Hepburn's Japanese & English Dictionary* の書名が確認でき（高橋俊昭「文明開化の蔵書目録『敬字文庫洋書目録』『中村正直先生文庫図書目録』」成蹊高等学校『成蹊論叢』第18号, 1979, pp. 124-170.）、翻訳作業時にも、この辞書が中村の手元にあった可能性は十分にある。
- 29) この点については、本論の後半であらためて指摘することになるが、『日本国語大辞典・第二版』第七巻（小学館, 2001）の「小説」の項には、曲亭馬琴の読本『椿説弓張月』『拾遺』（文化七年刊）の「序」、式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』

二編（文化七年刊）の「序」の用例が載せられている。

- 30) 大久保利謙「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述及び刊行について—若干の新史料の紹介とその検討—」（立教大学史学会『史苑』第26巻第2・3号, 1966, pp. 67-92.）には、中村が、幕府に自らの洋行を願い出た際の自筆草稿「留学奉願候存寄書付」が紹介されている。
- 31) 本文は、明治三十六年四月刊行の『敬字文集』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵）に拠り、引用の際に訓点は省略した。
- 32) 『明治文学全集 3 明治啓蒙思想集』（筑摩書房, 1967）所収の大久保利謙による「解題」（p. 448.）。
- 33) 岡本勲「『西国立志編』の文章—普通文の源流の一つとして—」（中央大学学術研究会『文学部紀要』第十巻第2号, 1975, pp. 1-25.）は、「『西国立志編』は、和文的要素に比し、訓読的要素の頗る強い性格の文章である」と分析している。
- 34) 注21に同じ。p. 4.
- 35) 『文藝』創刊号, 改造社, 1933, p. 142.
- 36) 章培恒・安平秋主編, 氷上正・松尾康憲訳『中国の禁書』, 新潮社, 1994, p. 180.
- 37) 注36に同じ。pp. 177-178. p. 181.
- 38) 清田儋叟「題水滸傳圖」。本文は、安永三年五月刊行の『孔雀樓文集』（福井市立図書館越國文庫所蔵）に拠り、引用の際に訓点は省略した。括弧内の書き下しは引用者による。
- 39) 本文は、明治三十一年十月刊行の『言志叢録』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵）に拠り、引用の際に訓点は省略した。括弧内の書き下しは引用者による。

（後半は次号に掲載予定）